

思想的アリーナとしての情報社会論

— モダニティの徹底化とCMC空間の意味をめぐる —

吉田 純

はじめに

近未来を含む現代社会の全体像を「情報社会」という包括的な概念によって捉えようとする議論は、すでに一九六〇年代以来現在に至るまで、四〇年にもわたる流れをもつ。それらの論点は——「情報社会」あるいは「情報化」という基本概念がそもそも何を意味するかも含めて——きわめて多岐にわたるが、論争の基本的な分水嶺は、「情報社会」を既存社会からの離脱として捉えるか、それとも既存社会との連続性において捉えるかという点にあったといえよう。フランク・ウェプスターが指摘するように、一方には「既存の社会とは大きく異なった「情報社会」の出現が目撃されているのだ、とする思想家」がおり、他方には「近代において情報が特別の重要性を持つことは認めつつも、現代と過去との連続性を強調する学者たちがある」。人口に膾炙してきた「情報社会論」は前者であったかもしれないが、ウェブスターは後者の意義、すなわち「情報化」を歴史的過程として捉え、「情報の発展ということを、歴史的な源流や継続性という視点から説明」する視点の重要性を強調している⁽¹⁾。

このような視点から「情報社会」を捉えるうえで、とりわけ示唆的なのは、モダニティ(近代性)についてのア

ンソニー・ギデンズの議論である。⁽²⁾ ギデンズの視座からは、現代の「情報社会」に関わる問題圏を——「グローバルゼーション」「リスク社会」など、二〇世紀末から二一世紀初頭の現在にかけて、それと関連しあいながら社会学・社会学の前景に浮上してきたいくつかの問題圏と同様に——「モダニティの徹底化」の帰結として顕在化した思想のアリーナとして読み解くことができる。

それらの問題圏の前景化とほぼ時期を同じくして、情報社会学の中心的なフィールドとして浮上してきたのは、CMC空間、すなわちインターネットに代表されるCMC (Computer Mediated Communication) ネットワーク上に出現した社会空間である。小林宏一が指摘するように、「サイバースペースとしてのインターネット上には……コミュニティとアソシエーション、管理と自律、中心と周縁、階級と階層、組織と個人、メイン・カルチャーとカウンター・カルチャー、伝統・モダン・ポストモダン、権力と反権力といった諸契機を含みこんだ社会的配置 (sociological configuration) が成立している」⁽³⁾。

CMC空間が、そのようにさまざまな思想的ヴェクトルが交錯するアリーナをなしているのは、そこが近代のさまざまな秩序原理(規範・価値)がその限界を問われるような空間として立ち現れているからである。ただしそれは、CMC空間がモダニティからの離脱、近代社会の「外部」であることを意味するのでは必ずしもなく、むしろモダニティの徹底化こそが現出させた社会空間であることを意味している、と捉えたい。いいかえれば、「近代化とは仮想化(バーチャル化)の過程であり、その延長線上にバーチャルコミュニティがある」ということである。本章の目的は、このような視点からCMC空間をめぐる言説の布置状況について考察することをおして、情報社会学の現状と課題を展望することである。⁽⁴⁾

ただし本章では、「サイバースペース」あるいは「ヴァーチャル・コミュニティ」という、それ自体が多義的な含みをもつ用語を無批判に用いることは避ける。とりわけ後者は「情報社会」概念全体もまたしばしばそうで

あつたように)多分に規範的な期待をこめられながら意味づけられ構築されてきた概念であり、その意味で「ヴァーチャル・コミュニティ」をめぐる議論は、それ自体がひとつの思想的アリーナをなしていることに注意したい。なぜCMC空間は(しばしば規範的・理想論的に)「コミュニティ」概念と結びつけられてきたのかという問いが、本章後半の議論の重要な補助線となる。

第一節では、CMC空間についての既存の言説を、「CMCはコミュニティを破壊するのか、それとも新たなコミュニティを創造するのか」という基本的対立、およびその双方を相対化し、CMC空間の自己準拠性を重視する第三の言説という三つの類型に整理する。第二節では、ギデンズのモダニティ論を参照しながら、CMC空間についてのそれら三種の言説が、CMC空間に集約されているモダニティの徹底化を、それぞれ異なる視点から意味づけたものであることを指摘する。第三節では、コミュニティ概念そのものを相対化する視点から、CMC空間の拡大が、一方では「分散的・排他的な共同性」の散乱、他方では親密圏／公共圏の構築というアンビヴァレントな可能性をあわせもつことを示しつつ、今後の情報社会論のための展望を得たい。

一 CMC空間をめぐる言説の布置

CMC空間の出現に対する当初の反応として現れた言説は、かつて多くの新しいメディアの登場の際にもそうであったように、楽観論と悲観論、つまりそれをポジティブに意味づけるかネガティブに意味づけるかという対立のかたちをとった。ただしCMC空間の場合に特徴的だったのは、いずれの意味づけにおいても、「コミュニティ」(共同体)という概念がしばしばキーワードとして用いられてきた点である。とりわけジャーナリストやテクナ言説においては、「インターネットは新たなかたちの素晴らしいコミュニティを創り出すのか、それともコ

コミュニティ全体を破壊するののか」という単純化された問いの構図がしばしば登場した。⁽⁵⁾つまりネガティブな言説は、CMC空間の出現をコミュニティの破壊を意味するものとして捉えたのに対し、ポジティブな言説はそれと正反対に、CMC空間が、既存の社会関係からの解放によって新たなコミュニティの形成を可能にすると主張したのである。

この肯定／否定という軸は、ジャーナリスティックな言説のみならずアカデミックなCMC研究においても、次のように基本的な分水嶺をなしてきた。⁽⁶⁾

(1) CMC空間についてのネガティブな言説の基本形態は、初期(一九八〇年代)のCMC研究にみることできる。それはCMC空間の「視覚的匿名性」(visual anonymity)という技術的特性にもつばら注目し、「社会的手がかり」(social cues)の欠如をCMCの本質とみた。「社会的手がかり」とは、表情・身振り・口調などの非言語的情報、あるいは相手の外見からうかがえる社会的地位など、対面的コミュニケーション(Face to face communication、以下FTFと略)の背景的前提となるコンテキストの総称である。CMCにおいてはこれが欠如しているために、それは「社会的・感情的・人格的次元の欠落したコミュニケーション」でしかありえないとされた。したがってこの言説においては、FTFがもつ「豊かさ」が自明の前提かつ評価基準であり、それとの対比において、CMCはその欠如態として、ネガティブに位置づけられたのである。⁽⁷⁾

ジャーナリスティックな言説にしばしば登場してきた「現実と仮想の取り違い」論や「オタク」批判論、CMCにおける「フレーミング」(非難・中傷・集中攻撃)をめぐる議論、匿名性からくる攻撃性や権力欲の暴走についての議論等々、CMC空間における日常的秩序からの逸脱を強調するネガティブな言説は、いずれもCMCをFTFの欠如態として捉える言説の系として位置づけることができる。⁽⁸⁾

(1) このアプローチの変種として、ポストモダニズムのCMC空間論がある。それは、CMCがFTFの欠如

態であるというネガティブな価値評価を、そのままポジティブに反転させるかたちで成立する。マーク・ポストラーによれば、C M C空間の「匿名性」は、F T Fにおいて重要な役割を果たす諸要因(制度的地位・個人的カリスマ性・修辭的技術・ジェンダー・人種など)をすべて無効化することにより、「参加の平等性」と「権力の脱中心化」をもたらし、「直接制民主主義」を実現させるとい⁽⁹⁾う。

(1)と(1)は、C M C空間への価値評価は正反対であるが、いずれもC M C空間とF T F空間との断絶性を強調し、そのうえで、前者を後者との対比によって評価する点で共通している。その意味で、(1)と(1)をまとめて、〈断絶性の言説〉と呼ぶことができよう。

(2) 一九八〇年代のC M C研究が(1)のように特徴づけられるのに対し、一九九〇年代に入り、パソコン通信、インターネットの一般への普及が進むとともに、C M C空間をポジティブに——それも、日常空間と断絶した空間としてではなく、むしろ連続した空間としてポジティブに——評価しようとする潮流が登場してくる。その特徴は、「C M Cをある種の実定性を備えた社会的空間として捉え、対人関係形成の場としてのC M Cを対象化しようとする」点にあった。そこでのキーワードとなるのが「コミュニティ」であり、C M C参加者はそれを「創造的に」使いこなす」ことよ⁽¹⁰⁾って「社会的手がかりの欠如」という技術特性を「克服」し、「豊かな」関係性」に裏づけられたコミュニティの形成を可能にする、という言説が生まれる。

この転換の背後には、一九八〇年代の「心理学的な実験」から、一九九〇年代の参与観察を軸としたC M Cの現場の「エスノグラフィックな記述」へと⁽¹¹⁾いう研究方法上の転換が存在した。このことは、C M C空間の客観的観察者ではなく参加者の視点が、ポジティブな評価に結びつく可能性を示唆している。事実、「ヴァーチャル・コミュニティ」という言葉は、C M C空間への参加者自身よ⁽¹²⁾って、その空間をポジティブに意味づけるための語彙として登場してきた。著書『ヴァーチャル・コミュニティ』でこの言葉を最初に人口に膾炙させた科学ジャ

1 思想的アリーナとしての情報社会論

ーナリスト、ハワード・ラインゴールドによれば、「ヴァーチャル・コミュニティ」とは、「ある程度の数の人びとが、人間としての感情を十分にもつて、時間をたっぷりかけてオープンな議論を尽くし、サイバースペースにおいてパーソナルな人間関係の網をつくらうとしたときに実現されるものである」⁽¹¹⁾。

(2) この方向性の言説は、(1)とは対称的に、(ユルゲン・ハーバーマスに代表されるような)モダニティの規範性を継承しようとする思想との親和性が高い。CMCによる「地縁」「血縁」からの解放と「情報縁」としての「ネットワーキング」を期待する言説や、CMC空間における新たな公共圏(理性的コミュニケーションによる社会的意志形成の場)の構築の可能性を追求する言説が、その典型的なものである。

(2)および(2)は、いずれもCMC空間と日常空間との連続性を強調する点で共通しており、またその点で、両者の断絶性を強調する(1)および(1)と明確な対称をなしている。その意味で(2)と(2)をまとめて、「連続性の言説」と呼ぶことができる。

ところで、以上の言説のほぼすべてに共通していたのは、日常空間のリアリティ、あるいは「コミュニティ」のイメージを自明の基準/理想としたうえで、CMC空間を認識/評価しているという点である。それらの言説においては、「CMCという本来明らかにされるべき対象が、FTFという基準/理想からの距離によってのみ評価され、CMCそれ自体の独自性を積極的に対象化することが理論的に困難になって」おり、「そこでは「CMCをCMCとして論じる」道はあらかじめ閉ざされて」いると批判される⁽¹²⁾。

(3) この問題点の克服、すなわち「CMCそれ自体の独自性を積極的に対象化する」方向性をもった言説が最近になって登場してきたことは注目される。それは、CMC空間の独自性を自己準拠性(reflexivity)の概念で捉える言説である。CMC空間の自己準拠性とは、コミュニケーションが既存の「状況的コンテキスト」(伝達された情報を理解するための背景的前提)に依存しえず、それをコミュニケーション自体のなかで構築していかな

ればならない、ということである。正村俊之によれば、CMC空間においては、「送り手と受け手がどのような関係にあり、「いま、ここ」がどのような状況であるのかを定義するのに必要な情報は、すべて意図的なコミュニケーションをつうじて産出される」。このことは、ある面では「コミュニケーションの困難さ」を増大させるが、「しかし逆の面からみれば、コミュニケーションが自らの過程をつうじて状況的コンテキストを構成する自由度が高まったことをも含意している」¹³⁾。

このように、CMC空間の規範やリアリティはCMC空間自身によつて自己準拠的に構築されなければならないと指摘する言説は、言説(1)(2)がそれぞれもつていたバイアスに対し、CMC空間に内在するニュートラルな視点から、それらの双方を相対化する可能性を示したといえる。この言説(3)をへ自己準拠性の言説と呼ぶことしたい。

ただし注意しなければならないのは、CMC空間の「自己準拠性」とは、それが日常空間と「断絶」していることを意味するのではないという点である。むしろ、加藤晴明が指摘するように、「私たちの日常世界がフィクションであり、仮構的なものである」という意味において二世界〔日常空間とCMC空間〕は「連続的」なのであり、「固形的実体(Concrete entity)として自」・関係・社会を指定するパラダイムを離れた構築的なリアリティ観を据えたいうえで、その構築の多様で複雑なヴァージョンと対峙していく必要がある¹⁴⁾。つまり言説(3)は、CMC空間のみならず、これまで自明視されてきた日常空間のリアリティもまた社会的に構築された(また、別様に再構築されうる)ものとして批判的に捉えかえす視点に、必然的に接続されるのである。

この視点からは、「断絶論」も「連続論」も、メディアの社会的文脈の視点が欠落している意味でメディア決定論である」と批判される。CMC空間がどのような意味とリアリティをもつた空間として立ち現れてくるか——日常的秩序からの逸脱をもたらすのか、それとも「コミュニティ」ないし「公共圏」として成立するのか——は、

「CMC実践の現場だけではなく、実践者が置かれている「社会的文脈」との関係によって左右される」のである。⁽¹⁵⁾ この社会的コンテクストこそは、CMC空間と日常空間とを問わず、そこでのコミュニケーションの過程を通じて、自己準拠的に構築されてくるものである。

二 モダニティの徹底化としての〈情報化〉

前節で述べた二つの意味、すなわちCMC空間も日常空間も自己準拠的に構築される社会空間であるということ、およびCMC空間の意味は、日常空間をも含めた社会的文脈に依存しているという二点において、CMC空間と日常空間は「連続」している。この連続性のゆえに、CMC空間をギデンズのいうモダニティの論理との連続性において捉えることが可能になる。

ギデンズのモダニティ論の根幹をなすのは、〈脱埋め込み〉と〈再帰性〉というキー概念であり、ギデンズはこれを「モダニティのダイナミズムの源泉」と呼んでいる。⁽¹⁶⁾

(1) 〈脱埋め込み〉(dis-embedding)とは「社会関係を相互行為の局所的な脈絡から「引き離し」、時空間の無限の拡がりのなかに再構築すること」である。それは、ローカルな脈絡を超えて流通する相互交換の媒体としての「貨幣」や、(法律・建築・医療などの)われわれの社会生活が常に依拠する「専門家システム」の確立という⁽¹⁷⁾ かたちで社会的に制度化されてきた。この〈脱埋め込み〉のダイナミズムは、後述の〈再帰性〉と相俟って、社会関係の世界規模への拡張としての「モダニティのグローバル化」⁽¹⁸⁾ をもたらす。

(2) この〈脱埋め込み〉は、その対概念としての〈再埋め込み〉(re-embedding)によって補完される。〈再埋め込み〉とは、「脱埋め込みを達成した社会関係が……時間的空間的に限定された状況のなかで、再度充當利用された

り作り直されたりしていくこと」である。すなわち、「グローバル化」はそのプロセスの一部として「局所的な変容」、すなわちローカルな社会関係の再編成を必然的にもなう。⁽¹⁹⁾〈脱埋め込み〉は貨幣や専門家システムという「抽象的システム」に対する「信頼」(「顔の見えないコミットメント」)によって支えられなければならないが、それは多くの場合、より基本的な「信頼」としての「顔の見えるコミットメント」、すなわち「ともにそこに居合わせている状況のもとで確立する社会的結びつきによって維持され……る信頼関係」によって〈再埋め込み〉されなければならないのである。⁽²⁰⁾

(3) 〈再帰性〉(reflexivity)とは、一般的には、行為においてその「根拠」がつねに参照され、それが行為にフィードバックされていくことを意味する。この意味での〈再帰性〉(行為の「再帰的モニタリング」)は必ずしも近代に固有のものではなく、「人間のすべての行為を規定する特性」であるが、近代の到来とともに「再帰性は、システムの再生産の基盤そのもののなかに入り込み、その結果、思考と行為とはつねに互いに反照し合うようになる」。それは、伝統や慣習が、つねに新たに得られた知識に照らして批判にさらされ、修正されていくことも含意する。このような近代の再帰性は、「社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見いだすことができる」。⁽²¹⁾

要するに近代の〈再帰性〉とは、行為・社会関係・システムがつねにそれ自身についての再帰的モニタリングをおこない、そうして得られた情報に基づいて自らを再構築していくということである。

〈脱埋め込み〉(およびその〈再埋め込み〉による補完)と〈再帰性〉は、一体となって累積的に進行するプロセスとして「モダンティの徹底化」を押し進める。社会関係がローカルな文脈から時間的・空間的に解放されたれ、それらがグローバルに拡大した時空間の中で、情報の再帰的モニタリングによって再構築されていくこの過程におい

て、情報通信技術がきわめて重要な役割を果たしてきたということは明らかであろう。貨幣が物理的制約から離れて(コンピュータ・ネットワーク上を)流通しうるものとなったこと、情報通信技術自体が新たな専門家システムとして社会基盤に浸透したこと、あるいは政治システム(国民国家)や経済システム(市場経済)の再生産において、情報の収集と管理による再帰的モニタリングのプロセスが、情報通信技術の導入によってより効率化・自動化されつつあることなどについては、(ギデンズ自身は必ずしも詳述していないが)改めて説明するまでもない。

このようにモダニティの徹底化とともに、情報通信技術が社会の本質的な構成要素として組み込まれ再構築されていく過程を「情報化」と呼ぶとすれば、モダニティの徹底化のプロセスは、それ自体「情報化」のプロセスでもある。そして、このプロセスが日常生活世界にまで浸透することによって出現したのが、CMC空間であった。

前節でみたように、CMC空間をめぐる主要な言説は、「断絶性の言説」×「連続性の言説」×「自己準拠性の言説」という三つの類型に整理することができた。これらをギデンズのモダニティ論の枠組のなかに置きなおしてみれば、「断絶性の言説」は「脱埋め込み」に、「連続性の言説」は「再埋め込み」に、そして「自己準拠性(reflexivity)の言説」は「再帰性」(reflexivity)に、それぞれ対応していることがわかる。すなわち、CMCによって社会関係がローカルなコンテキストから引き離されていくというベクトルは「断絶性の言説」によって、CMC空間において社会関係がローカルなコンテキストに再接続され、パーソナルな信頼関係が再構築されていくというベクトルは「連続性の言説」によって、そしてCMC空間がそれ自身の再帰的モニタリングによって再構築されていくというベクトルは「自己準拠性の言説」によって、それぞれの言説の平面上に捉えられ、位置づけられている。この三つのベクトルを俯瞰する視点に立てば、CMC空間は、まさにモダニティの徹底化を集約的に具現した社会空間のモデルとして立ち現れてくるのである。

現実の「情報化」、そしてCMC空間の構築はこの三つのベクトルの合力として生成されるプロセスであり、

一つだけを取り出して「情報化」やCMC空間の本質とすることはできない。とくに「脱埋め込み」と「再埋め込み」は単純な対抗関係にあるのではなく、むしろ循環的・相互補完的なプロセスであることに注意しなければならぬ。CMC空間は、「断絶性の言説」が主張したように単純に「コミュニティ」を破壊するわけでも、「連続性の言説」が主張したように単純に「コミュニティ」を実現するわけでもない。CMC空間がどのような意味をもつた空間として立ち現れてくるかは、つねにそのつどの社会的文脈に依存しており、その意味で流動的なのである。さらに、ギデンズが「再埋め込み」の概念を、「顔の見えない、コミットメント」(抽象的システムへの信頼)が「顔の見える、コミットメント」(共在状況で確立される信頼関係)によって補充されることとして定義していたことにも、ここで注意しておきたい。「顔の見える、コミットメント」という概念を字義どおりに理解すれば、それはFTFにおいても「顔の見える、コミットメント」が可能であるかのように、CMC空間を描き出した。そして、そのような「信頼関係」が確立される場としてCMC空間を意味づける際に、最もしばしばキーワードとして用いられてきた概念が「コミュニティ」だったのである。

三 「情報化」のアンビヴァレンス

1 コミュニティのアンビヴァレンス

ここでわれわれは、「なぜCMC空間は(しばしば規範的・理想論的に)コミュニティ概念と結びつけられてきたのか」という問いに直面することになる。本節ではこの問いを導きの糸とし、コミュニティ・共同性の概念そのものを批判的に再検討することによって、CMC空間がモダンティというマクロな社会的文脈のなかでもちう

る意味をさらに追求したい。

社会学史においては、テンニースの「ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト」およびマツキーヴァアの「コミュニティ／アソシエーション」の対概念に代表されるように、「コミュニティ」「ゲマインシャフト」は、つねに近代的な社会関係である「アソシエーション」「ゲゼルシャフト」の対立概念として理解されてきた。安川一・杉山あかしはこの文脈を踏まえつつ、CMC空間に対して「コミュニティ」という言葉が好んで使用されてきた理由について、B・アンダーソンの『想像の共同体』における近代の国民国家の形成についての議論を参照しながら、「共有された情報を基礎とする共同性意識の生成」が、(よりミクロなレベルにおいてではあるが)現在のCMC空間においても、それがもたらす「情報的な近接関係」によって生起しているのではないかと示唆している⁽²³⁾。

このようなコミュニティ・共同性の生成は、本質的にアンビヴァレントなものである。なぜなら、(近代の国民国家の歴史が示すように)それはコミュニティの内部における普遍的価値の共有と連帯を可能にするが、それは同時に、コミュニティの外部に対する閉鎖・排除・敵対をも意味するからである。このアンビヴァレンスの存在を想起すれば、CMC空間についての(連続性の言説)がしばしば「コミュニティ」概念を自明の基準／理想としてCMC空間に無媒介に接続してきたことは、あまりにもナイーヴかつオプティミスティックな短絡であったといわざるをえない。

とりわけ、それが(第一節の(2)のように)ハーバーマスのモダニティの規範性を思想的バックグラウンドとする場合には、この無媒介な接続は思想的自己矛盾にさえつながりかねない。しかしながらこのような自己矛盾の可能性は、コミュニティ・共同性という空間的イメージを公共圏・公共性というもうひとつの空間的イメージに、両者の概念的差異を捨象し無媒介に接続することによって、隠蔽されてきたと考えられる。つまりここでは、パーソナルで親密な関係性の空間としてのコミュニティの生成が、討議と合意形成の空間としての公共圏の形成を

可能にし、前者が後者を支えるという構図が(意図的にせよ非意図的にせよ)思い描かれていたのである。⁽²⁴⁾

2 「分散的・排他的な共同性」としてのCMC空間

しかしながら、CMC空間の現実社会への浸透と研究の進展とともに、少しずつではあるが、コミュニティ・共同性概念のネガティブな含意を抽出する言説が登場してきていることは注目される。

たとえば大澤真幸は、やはりB・アンダーソンの議論を参照しながら、インターネットによって可能になった「ロング・ディスタンス・ナシヨナリズム」の存在に注目する。「ロング・ディスタンス・ナシヨナリズム」とは、(たとえば英米のアイerland系市民がインターネットを通じて経済的・イデオロギ的にIRAを支援するよう)「国民国家のバウンダリーとはまったく無関係に、インターネットを通じて一個のナシヨナリスティックな自覚が芽ばえる」現象のことである。このように、かつてマクルーハンが夢想した「グローバル・ヴィレッジ」のイメージとは逆に、より細分化された共同体へと世界が分割されていくというヴェクトルは、たとえば日本の「オタク」たちの、マイナーな知識の共有にもとづく親密な共同性にもみられる。「電子メディアというのは、マクルーハンが想像していたようなユニバーサルで包括的な共同性へと向かうという方向ではなくて、逆に分散的で排他的な共同性へと人間の社会を導いている」と、大澤は診断をくだす。⁽²⁵⁾そして大澤はその理由を、CMCがもたらす「極限的な直接性」「直接的で親密な関係」、すなわち「電子ネットワークワークによって、直接性を偽装したコミュニティのなかに自分たちが組み込まれる」という特性のなかに見いだしている。⁽²⁶⁾

大澤のいう「極限的な直接性」とは、安川・杉山のいう「情報的な近接関係」、すなわち物理的・社会的距離を超えて心理的接近を可能にするというCMC空間の特性の文字どおり極限において現出するものである。正村も大澤と同様に、インターネット上の無数の「部族組織」「秘密結社」は「社会的距離の拡大と心理的距離の縮

小という条件のなかで成り立っている」とし、CMCがもたらす「結合」は「分離を随伴した」「しばしば閉鎖的でもある」結合であると述べている。⁽²⁷⁾

それでは、CMC空間は、「分散的・排他的な共同性」へ向かうベクトルしかもちえないのだろうか。〈連続性の言説〉のオプティミスティックな期待は、まったく無根拠な短絡でしかなかったのだろうか。この問いを考えるうえで示唆的なのは、安川・杉山が、ある事例(パソコン通信フォーラムの運営をめぐる論争)を解釈するために設定した「三つのモーメント」、すなわち「システム圧力」「コミュニティ圧力」「対話的コミュニケーション圧力」という枠組である。

「システム圧力」とは、CMC空間の外部の「経済関係」や「権力関係」からくるものであり、「社会状況自体を課題として議論を深化していくことを阻害する」圧力である。「コミュニティ圧力」とは、CMC空間に「コミュニケーション欲求の充足」のみを求め、それがもつばら「社交の場として機能すること」を求める圧力である。そして「対話的コミュニケーション圧力」とは、「単なる仲間作りよりは、議論している内容についての問いかけ・答え」「議論内容についての検討の掘り下げ」を求め、「対話的理性へと開かれたコミュニケーションの場」を生成しようとする圧力である。「この三つのモーメントは、整合的に働く場合もあれば、対立的に働く場合もある」⁽²⁸⁾。

安川・杉山が取り上げた論争の事例では、フォーラムの管理者を中心とする仲間集団が「コミュニティ圧力」を、これに対する批判派のグループが「対話的コミュニケーション圧力」をそれぞれ担い、両者が対立的に働いていたとされる。しかしながら(安川・杉山は具体例を挙げてはいないが)、それとは逆に、両者が「整合的に働く場合」、つまり「社交の場」としてのCMC空間が同時に理性的コミュニケーションの基盤として機能する可能性も、論理的にはありうるはずである。その可能性になんらかの(理論的・経験的)根拠を見いだすことができ

れば、〈連続性の言説〉を——その思想的バックグラウンドとしてのモダニティの規範性ととも——批判的に継承していく可能性も開かれることになる。

3 もうひとつのシナリオ——親密圏／公共圏

その可能性を探ることは、理論的には——情報社会論の文脈には限定されない課題であるが——コミュニティ・共同性と公共圏・公共性を無媒介に接続するのではなく、両者の関係を批判的に捉えかえし、両者の接続が可能となる条件を探るということである。

共同性と公共性は、原理的にはまったく相容れない対立概念として定義することも可能である。齋藤純一によれば、共同性とは「閉じた」「等質な価値に充たされた」「一元的・排他的な帰属」の空間であり、それに対し公共性とは「開かれている」「複数の価値や意見の〈間〉に生成する」「複数の集団や組織に多元的にかかわる」ことの可能な空間である。⁽²⁹⁾ いかえれば、前者がアイデンティティ・同一性を原理とする空間であるとすれば、後者は〈あいだ〉・差異を本質とする空間である。

しかしながら、両者は「空間」であるという一点において共通している。両者の本質的差異は、空間の内部と外部とを隔てる——そのことによつて空間自身を定義する——境界線を、空間自身が再帰的(reflexive)に引きなおすことができるか——そのことによつて、空間自身を再定義することができるか——という一点にかかっている。「空間」とは、定義上、その内部に距離(あいだ)・差異をはらむはずのものである。にもかかわらずその距離が無化されるのは、外部との境界線が固定され、再帰性(反省性)が失われることによつて、内部が等質性に満たされたときである。

そのような再帰的(反省的)な空間の再定義の可能性を、齋藤は(コミュニティ・共同性の概念を用いずに)「親

密圏／公共圏」という対概念のなかに見いだしている。公共圏が「人びとの〈間〉にある共通の問題への関心によって成立する」空間であるのに対し、親密圏は「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」空間である。この意味での「親密圏」は、セルフヘルプ・グループの例に典型的にみられるように、「情報や意見の交換を通じて直面する問題への認識を深め、外に向かって問題を提起していくという公共圏の側面をあわせもつ」ことがある。「というよりもむしろ、新たに創出される公共圏のほとんどは親密圏が転化する形で生まれるといった方がより正確だろう」⁽³⁰⁾。このような転換が可能なのは、公共圏／親密圏においては、それぞれの内部と外部、とりわけ「公共」と「親密」との境界そのものが、つねに再帰的に再定義されるからである。すなわち、フェミニズムが先駆的かつ代表的に標榜したように、「公私を分ける境界線は言説に依存する流動的なものであり」「公共的なもの」は、何を「個人的なもの」「私的なもの」として定義するかによって、反照的に定義される」からである⁽³¹⁾。

C M C空間が「情報的な近接」さらには「極限的な直接性」へのベクトルしかもたないとすれば、それは公共性へは向かわず、「分散的・排他的な共同性」にのみ向かうことになるだろう。しかしながら、C M C空間が「空間」である限り、その内部にも距離（へあいだ）・差異（はらはら）ははらまれていないはずであり、その境界の再帰的な再定義の可能性も閉ざされてはいないはずである。そのような可能性を示唆する経験的事例として——紙数も尽きたので——ここではひとつだけに言及しておこう。

インターネット上には、働きながら子育てをしている母親、いわゆる「ワーキングマザー」のためのウェブサイトが数多く存在する⁽³²⁾。それらの多くは、仕事や育児あるいはその両立という、多くの女性がこれまで「私的」に抱えてきた問題を、同じ立場の女性たちが物理的・社会的距離を超えて共有しあい、なんらかの解決策を探ることを目的とするものである。そうしたサイトの代表的なひとつである「ムギ畑」(<http://www.mugi.com/>)の

(自身も「ワーキングマザー」である)開設者は、マス・メディアのインタビュイーに対して、「働き方も職種も違うけれど、共通の悩みを持つている人から、千差万別の事例が聞ける」と、そのメリットを述べている。³³この空間は、さまざまな差異をはらんだ彼女たちの具体的・個別的な生の問題から出発しつつ、その(あいだ)にある共通の問題への関心によって成立しているのである。

ハーバースが構想するように、私的生活空間に源を発するさまざまなテーマが公共圏へと流れだし、やがて「公論(public opinion)として集約される」という大きな「テーマの流れ」が公共性を実現するのだとすれば、そうしたウェブサイトをC M C空間に生成される親密圏／公共圏は、まさにその上流において、水門を開き水路をつくりだす役割を担いとうといえよう。⁽³⁴⁾

モダニティというマクロな社会的文脈のなかで(情報化)のヴェクトルは、「分散的・排他的な共同性」の方向にも、新たな親密圏／公共圏の構築という方向にも向かうポテンシャルをもつ。それぞれがどの程度、またどのように実現されるかは、今後、(情報化)とC M C空間がどのような社会的コンテクストを再帰的に構築していくかにかかっている。情報社会論という思想的アリーナは、現在、まさにこのようなアンビヴァレンスをその中心にはらんだ布置をなしているのである。

注

- (一) Frank Webster, *Theories of Information Society*, Routledge, 1995(フランク・ウェブスター『「情報社会」を読む』田畑暁生訳、青土社、二〇〇二年、一三一―一四、三二九頁)。ここでウェブスターが前者の例として挙げているのは、ベルの「ポスト工業社会」論やボードリヤールらのポストモダニズムなどであり、後者の例として挙げているのは、ギデンズの国民国家と「監視」についての議論やハーバースの「公共圏」論などである。「既存社会」を「近代社会」

に置き換えれば、この二つの潮流は、近代社会からの離脱としての「情報社会」を強調する言説と、近代社会からの連続性において「情報社会」を捉えようとする言説として捉えなおすことができる。その意味で二つの潮流は、より広範な社会理論・社会思想の布置状況におけるモダン／ポストモダンという対抗関係の縮図をなしてきたとみることも可能である。この視点からの情報社会論についての考察としては、拙著(吉田純『インターネット空間の社会学——情報ネットワーク社会と公共圏』世界思想社、二〇〇〇年)第三章などを参照。ただし本章では、主としてギデنزの議論に依拠することにより、モダン／ポストモダンという対立軸そのものを相対化し、ポストモダンニズムの論点をも近代の再帰的(reflexive)な自己展開の帰結として捉えなおすという視点をとりたい。

(2) Anthony Giddens, *The Consequences of Modernity*, Polity Press, 1990(アンソニー・ギデنز『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、一九九三年)。

(3) 小林宏一「メディア性とメディア秩序——メディア論の今日的課題」、児島和人編『社会情報』講座社会学8、東京大学出版会、一九九九年、二六五頁。

(4) 遠藤薫「仮定性への投企」『社会学評論』第四八巻四号、一九九八年、五六頁。

(5) Barry Wellman and Milena Gulia, "Virtual communities as communities", in: Peter Kollock and Marc A. Smith (eds.), *Communities in Cyberspace*, Routledge, 1999, p. 167.

(6) CMC空間と日常空間との「断絶性」を強調する言説(1)と「連続性」を強調する言説(2)という分け方は、加藤晴明「CMC空間と自己物語——コンテクスト論争と閉ざされた主題」(『中京大学社会学部紀要』第一四巻一号、一九九九年)に示唆を受けたものである。

(7) 土橋臣吾「コンピュータ・ネットワークのコミュニケーション論——CMC研究およびその背後仮説の批判的検討」『社会学研究』第三号、一九九九年、一一四—一一五頁。

(8) 加藤、前掲論文、九四頁。

(9) マーク・ポスター『情報様式論——ポスト構造主義の社会理論』室井尚・吉岡洋訳、岩波書店、一九九一年、二三三頁。

(10) 土橋、前掲論文、一一五—一二六頁。

- (11) ハワード・ラインゴールド『バーチャル・コミュニケーション——コンピュータ・ネットワークが創る新しい社会』会津泉訳、三田出版会、一九九五年、二〇頁。
- (12) 土橋、前掲論文、一一七頁。
- (13) 正村俊之『コミュニケーション・メディア——分離と結合の力学』世界思想社、二〇〇一年、六八―六九頁。
- (14) 加藤、前掲論文、一〇〇頁()内は吉田。
- (15) 同右。なお加藤自身は、この意味での日常空間とCMC空間との連続性を強調することにより、CMC空間への自らのアプローチを「連続性アプローチ」のなかに位置づけている。それに対し本章では、自己準拠性の言説を第三の立場として位置づけることにより、断絶性の言説へ連続性の言説の双方を相対化するという視点をとりたい。この視点からは、加藤の立場も(加藤自身は「自己準拠性」という概念は用いていないが)自己準拠性の言説のなかに位置づけられることになる。
- (16) ギデンズ、前掲書、七二―七三頁。なおギデンズは「脱埋め込み過程の最も重要な条件」として、「時間と空間との分離」(時間と空間とがともに均一に測定・管理可能なものとなること)により、自在に再結合・再秩序化される過程)をもう一つの「モダニティのダイナミズムの源泉」として挙げているが、議論の煩雑化を避けるために、ここではこれを「脱埋め込み」の概念のなかに含めて理解することにした(同書、三三―三四頁)。
- (17) ギデンズ、前掲書、三五―四四頁。
- (18) 同右、八四頁。
- (19) 同右、八五頁。
- (20) 同右、一〇二―一〇三頁(傍点は吉田)。
- (21) 同右、五三―五五頁。
- (22) ギデンズは「顔の見えるコミットメント」による(再埋め込み)の例として、ビジネススマンの出張、芸能人の仕事仲間との食事、研究者の学会報告などを挙げている(前掲書、一一頁)。
- (23) 安川一・杉山あかし「生活世界の情報化」、児島和人編『社会情報』講座社会学8、東京大学出版会、一九九九年、一〇六頁。

- (24) この無媒介な接続は、必ずしも情報社会論の文脈に限定されず、公共性／公共圏をめぐる、より一般的な議論でおこなわれているとも考えられる。三上剛史は、「新たな公共性を求める議論が、「国家」(権力)と「市場」(貨幣)からの自由を強調するならば、同様に「コミュニティ」(共同性)からの自由も強調されなければ、論理的な整合性に欠ける」にもかかわらず、「新たな公共性の実現が同時に、「真の」共同性を実現するかなのような知的雰囲気が存在する」と指摘している(三上剛史「複合社会の公共空間——正義、アイデンティティ、公共性」、神戸大学「近代」発行会『近代』第八七号、二〇〇一年、一〇二頁)。
- (25) 大澤真幸「電子メディアの共同体」、吉見俊哉・大澤真幸・小森陽一・田嶋淳子・山中速人『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社、一九九九年、五〇―五五頁。
- (26) 大澤、前掲論文、九二頁。
- (27) 正村、前掲論文、八三頁。
- (28) 安川・杉山、前掲論文、一〇四頁。
- (29) 齋藤純一「公共性」岩波書店、二〇〇〇年、五一―六頁。
- (30) 齋藤、前掲書、九二―九五頁(傍点は原文)。なお齋藤はここで「公共圏」の概念を、グローバルな討議と意志形成の空間という(従来しばしば使われてきた)意味ではなく、「複数形で扱うことができる」「一定の人びとの間に形成される言論の空間」という意味で用いている(同書、x頁)。
- (31) 齋藤、前掲書、一二頁(傍点は原文)。
- (32) 日本国内に限定しても、たとえばYahoo! JAPAN(<http://www.yahoo.co.jp/>)に「ワーキングマザー」というカテゴリで登録されているサイトは、二〇〇五年一月一日現在、(後出の「ムギ畑」を含め)三五箇所存在する。
- (33) 『朝日新聞』二〇〇〇年五月二二日付夕刊(東京版)、七面。
- (34) ハーパーマスの公共性／公共圏論については、前掲拙著『インターネット空間の社会学』の「付論」を、またへ情報化・CMC空間と公共性との関係については、同書第五章および吉田純「サイバースペースと公共性——情報公共圏論の展望」伊藤守・林利隆・正村俊之編『情報秩序の構築』社会情報学への接近3、早稲田大学出版部、二〇〇四年)を参照。